灰色のセカイ

戌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色のセカイ

【Ｎコード】
Ｎ２７８７Ｆ

【作者名】
戌

【あらすじ】
恋だの何だの・・・バカじゃねぇの？

Ｏｐｅｎｉｎｇ（前書き）

この作品は人気がなければ削除するつもりなのであしからず。面白いと思ってくださいましたら感想などに書き込んでくださいｍ（＿）ｍ

Opening

目覚まし時計が七時を知らせる。

「うるせーな・・・。」

自分でセットしたのに一秒たりとも狂わずに仕事をこなす時計に嫌気が指す。

山口陸。カタカナ表記でヤマグチリク、それが俺の名前。

とりあえず時計を黙らせて制服を着た。

食卓には・・・誰もいない。

わが家はいわゆる母子家庭という奴で、母は朝早く家をでて夜遅くに帰ってくる。

テレビをつけると朝の定番の番組が映った。

コーヒーをすすりながら、ぼんやりしているとチャイムがなった。

テレビを消し、まだあたらしいブレザーを着て玄関に向かった。

1．いきなりのイベント

「陸！おはよ～う！」

朝からハイテンションなこいつは中学からのダチの相田涼。

「朝からうるせーよ。静かにしろ。涼。」

「今日もクールだねぇ。陸くんは。」

ふざけた口調の涼にイラッと来たことはあったがいまはそこまで気にならない。

「クールじゃねぇよ。ただ、だるいだけだ。」

鍵をしめたのを確認すると俺らは歩きだした。

高校へ向かう道もまだ数えるぐらいしか歩いていない。

それでも通い続けて一ヶ月ぐらいだが、未だにクラスの奴とは打ち解けていない。

そんな俺に対して涼は人懐っこい性格のおかげで男子はもちろん女子の何人かとメアドも交換したらしい。

ちなみに俺のアドレス帳は女子は母のものしかない。

「陸ももっと話をしたらモテるのに・・・。」

涼が俺の顔を品定めでもするかのように観察してきた。

「俺はモテたい訳じゃねぇから。」

「もてたくない男なんていない！」

これが涼の言い分。何度言ってもいつもこう言う。

門をくぐり教室の窓際の席に座ったと同時にチャイムがなった。

担任の女の教員が教室にズカズカと入ってくる。

「おはよう！生徒諸君！」

背丈はクラスのなかで一番小さい涼より低いであろう女教師もとい小林はいつもテンションが高い。

「さて朝のロングホームルームでは、二週間後に迫った林間学校の班決めだ。委員長のえー・・・と高橋！仕切れ！」

小林の指さしためがねをかけた真面目そうな男子が立ち上がった。

「えっと、じゃあ決め方は何がいいですか。」

班に応じて席も変わるので会議は難航した。

そのとき高橋と目があった。

「山口は何がいい？」

チッ。何で俺に振るんだよ。

「なんでもいい。」

そういうと高橋は、俺が明らかにだるそうなのが分かったらしく小さく舌打ちをした。

「そういう態度はよくないと思うな。」

確かにこいつの言っていることは大人受けするものだろう。しかし俺がこいつに抱いた印象はズバリ”うぜぇ”だった。

結局アミダで決めることとなり、俺と涼は同じになった。

涼は女子が誰になるか、そればっかりだった。

1．いきなりのイベント（後書き）

こんにちわ。戌といいます。まだ恋愛要素は出てきておりませんが少しづつでてくるとおもいます。

2．アンポニ

む・・・。

寝てしまっていたか。

イヤホンは聴いてもいない音楽を奏で続けていた。

腹減ったな。

俺はいま屋上のタンクの上にいる。

梯子を降りると三人の女子が円になって昼食をとっていた。

こんなところに人がいるとは思わなかったのか唖然としている。

こいつら顔が赤い。というか赤くなった。

手前のポニーテールの子があんパンを落としていた。

あーあ・・・。もったいない。

そんなことを思いながら校舎に戻った。

教室では涼が例の班のメンバーとくっちゃべっていた。

「陸ぅ～。どこいってたんだよ～？」

「昼寝だ。」

「山口。」

涼と話をしていた女子が話しかけてきた。

「ああ？」

きつかったか？まあどうでもいいや。

えー・・・と。萩本？萩本美樹。確かそんな名前。

萩本は長い髪を束ねている。

シンプルイズベストってか？

顔はかわいいというより綺麗という表現がいいだろう。

しかし俺の心臓はいっぺんの狂いもなく単調なリズムをとっている。

「あんた、美化委員になったから。」

は？

「いや、は？って顔されてもね。まあ自業自得ね。」

俺なんかやったっけ？

この問いに四人目の班員が答えをもたらした。

「山口君がサボっていた間に決まっちゃったの。」

たしか西野彩って子だ。
萩本と対象的な印象を受けた。
まあ世間一般的にいう、まるっこくてかわいいってやつだな。
「立候補がいないからって高橋くんが勝手にきめちゃったの。」
ネクラな奴。
「まあそのおかげでこんな美人と一緒にいられるわけだ。ありがたく思え。」
あはは、と笑いながら萩本は西野を抱き寄せた。
「それとも、山口はこっちのほうが好み？」
西野の頬をつつきながら萩本は冗談混じりにきいてきた。
このテンション苦手だ・・・。
先が思いやられる。
すべての授業が終了した。
鞄に荷物を入れて帰ろうとすると肩をたたかれた。
「・・・萩本？」
はて？何かあったかな？

「委員会。」

「じゃあ美樹ちゃん、私は部活行くね。」

「うん。じゃあね、彩。」

萩本が小さく手を振った。

遠目に涼が西野に話しかけているのがわかった。

あいつのことだ。部活が終わったら一緒に帰ろうとか言ってんだろ。

西野は涼のストライクゾーンド真ん中だしな。

「じゃ、行くよ。」

委員会はだるくてたまらなかった。

担当の先生が婆さんで、これがうるさい婆さんなんだよ。

姿勢が悪いだのどうのこうの・・・。

小言を言う姑みたいな奴だ。

一時間話をした挙げ句、内容は仕事内容と一週間ごとの掃除当番が今週は俺らということだけ。

めんどくせえ、と思っていた時隣に座っていた萩本がうれしそうな顔をした。

そうして俺と萩本は掃除道具をとりに美化倉庫へ向かった。

重い足を引き吊りながら萩本の後についていった。
階段にさしかかり萩本の姿が見えなくなった。
「・・・逃げるか。」
そろりと足を忍ばせて俺は回れ右をした。
すると教室から女子が出てきた。
「あっ。」
あっ、と言われましてもねぇ・・・。
誰？
「あ、あの。山口君話があるんだけど・・・。」
「何？急いでんだけど。」
逃げたいしね。
てゆーか君誰？
「あ、うん。じゃあ手短にいうね。・・・すす、好きです。」
「あ、どうも。じゃ。」
立ち去ろうとするとその子があわててポニーテールが揺れた。

あ、昼間のあんパンポニーテールちゃんだ。

略してアンポニ。

「好きだって言われたのは嬉しいけど、それで君はどうしてほしいの？」

アンポニは意味がわからないと言う顔をした後あぁなるほどという顔をした。

「あ、じゃあつき合ってください。」

ここで何に？と聞くほど俺は天然ではない。

はて困った。

アンポニは不細工なわけではないむしろ可愛い部類に入る。しかし、俺の心臓は単調なリズムをとっている。変化もない。つまり、ドキドキしない。

「ごめんけど・・・。」

そう言いかけると萩本が階段を上がってきた。

「陸？」

アンポニは俺と萩本の顔を交互にみて何か誤解とともに納得した顔をした。

「あ、そういうことだったんですね。」

「は？ちょっとまて君は誤解を・・・。」

「どうぞお幸せにっ！」

声をふるわせてアンポニは走り去った。

2．アンポニ（後書き）

やっとヒロイン登場です。よければ評価お願いします。

3．敵

「あ、なんか邪魔しちゃった・・・？」

萩本はしまった、という顔をした。

「いや、どうせ断るつもりだったし。」

「なんで！？可愛いコだったのに！バカだねアンタ。」

バカと言われたのにはカチンときたが、すぐに低い声で言い返した。

「タイプじゃねぇし。」

もちろん嘘。

「じゃあ、どんなのがタイプなのよ。」

う・・・聞かれたらどういうか考えてなかった。

「・・・掃除行くぞ。」

「逃げるなー！教えろ！」

後ろから何か聞こえたが無視。

掃除するポイントは普段掃除のされない校舎裏。

とりあえず箒で掃く。
「陸。」
萩本の口が開いた。
「・・・なんで下の名前で呼んでんだよ。」
「いいじゃん。イヤ？」
「イヤと言ったら？」
ちょっと試してみた。
「うーむ・・・。アンタはそういうこと言わないでしょ。」
今日会ったおまえに何がわかるというのだね？
「今日知り合った奴にいきなり名前を呼ばれてもなぁ。」
「・・・はい！掃除終わり！」
「おぉ。」
以外と早く終わったな。
「じゃ、掃除道具片づけてくるね。」
萩本は箒とちりとりをかかげて言った。
「おぉ。じゃあな。」

教室に鞄を取りに行こうとすると
「ちょっと待って！」
「何？」
「あたしの荷物も持ってきて。門のところにいるから。」
じゃ、よろしく。と、言って萩本は倉庫へ向かった。
やれやれ・・・。
教室に戻ると人が残っていた。
誰だ？
そいつは俺に気づくと声をかけてきた。
「やあ、待ってたよ。」
「高橋・・・。」
もっとも会いたくない奴だった。
「何だよ・・・。」
「そんなに毛嫌いすることないだろ。・・・まあいいだろう。単刀直入に聞く。君は萩本さんのことどう思ってる？」
「普通。」

こいつ萩本が好きなんだな。

「ふぅ・・・。よかった。」

「なにがだ？」

俺がそういうと高橋は見下したような目をしてきた。

「いや、萩本さんに変な虫がついたら大変だからね。」

「虫・・・だと？」

それはどっちかっていうとおまえだろ。といいたいが堪えた。

「単刀直入にいう。」

単刀直入、しか言えねぇのか？こいつ。

「僕は君が嫌いだ。少し顔がいいからってクールぶってイラつくんだよ。」

高橋の顔が醜く歪む。

「奇遇だな。俺もテメェが嫌いだ。言いがかりつけてんじゃねぇぞクソ優等生。」

俺が冷ややかな視線をプレゼントすると高橋ははをカチカチならしだした。

「おまえなんか・・・。」

下を向いてぶつぶつ言っているがよく聞こえない。

その間に俺の鞄とキーホルダーのついた萩本の鞄を持って教室を出ようとした。

「お前！何してる！」

高橋が声を上げた。

こいつにはちょっと絶望を味わってもらうか。

「一緒に帰るんだよ。アバヨ、高橋委員長。」

真っ赤な嘘とはこのことだ。

ドアを乱暴に閉めた。

勝った。

満足感と共に門で待つ萩本の元へ向かった。

4．ワガママ？

門の前で萩本は立っていた。

「遅い！陸！」

両手に鞄を持った俺の頭にチョップをしてきた。

「あー、悪い悪い。ほれ、鞄持ってきたぞ。」

鞄を萩本の前に突き出す。

・・・。

・・・・・？

萩本は小さく口を開いた。

「持って。」

「は？」

「家まで持って。」

「つまり一緒に帰れと。」

萩本はコクリ、とうなづいた。

「・・・分かった。」

幸い今日は下校生徒の少ない時間帯だ。
噂になることも少ないだろう。
そうして俺と萩本は歩きだした。
「一つきいていいか？」
「何？」
「高橋のことなんて呼んでる？」
「高橋って呼んでる。どうした？」
・・・何故俺は名前？
「なんでもない。」
と、話していると俺の家を通り過ぎてしまった。
「あたしさ、イイ奴だけ名前で呼ぶんだ。」
「そりゃ、どうも・・・。」
イイ奴とか言われても・・・。
「ねぇ、陸って言われるのイヤ？」
「別にいいが、面倒なことは避けたい。」

「あ、着いた。ここだよ。」

俺の家からコンビニへいく途中にあるマンションだった。

今度は差し出した荷物を素直に受け取ってくれた。

「ありがと。あのさ、ケータイ貸してくれない？」

「別にいいけど・・・。」

ポケットからケータイをだして放ってやった。

「わわっとっと・・・！ケータイ投げる奴がおるか！」

「どうせ使わねぇし。」

萩本は俺のケータイのアドレスをメモするとおもむろにいじりだした。

「女の人のメアドがお母さんだけ・・・！？」

萩本は意外だという顔をした。

「文句あるか？」

「中学の時彼女は？」

「いない。」

「へぇ、意外だわ。じゃあ、後でメールするね。バイバイ。」

そう言い残し萩本はマンションの中へと消えていった。

帰り道にケータイを開くと下書きが保存されていた。

内容は”今日はありがとね♪”といったもので、いつも使われることのない絵文字が姿を現している。

家に帰る頃にはもう部活を終え下校している生徒がいた。

家の鍵を開ける時に気づいたが無意識の内に鼻歌を歌っていた。

あれ？と、首を傾げていると電話がかかってきた。

「もしもし？」

「あ、陸？」

涼だった。まぁディスプレイを見れば分かるのだが。

「なんだ？」

「陸。きいてくれよ～。おれ彩ちゃんといい感じなんだけど。」

「彩ちゃん？」

「西野だって。」

「あぁ、あいつか・・・。」

「で、そっちはどうだ？」

「なにが？」

「萩本さんと。」

「えー・・・と。宣戦布告された。」

「はあ！？」

思わず電話を耳から遠ざけた。

「あの高橋って奴。」

「あのネクラか。」「あいつ萩本が好きなんだとよ。」

「え・・・？」

涼が凍り付いた。

「なんだ？」

「鈍感だとは思っていたが・・・まさかここまでとは・・・。」

電話越しにため息が聞こえる。

「で？なんて言われた？」

「萩本に近寄るな、だそうだ。」

「なんだそりゃ。」

「なあ、なんであいつは萩本が美化委員をするのに俺に美化委員を押しつけたんだ？」

「バカか？お前が押しつけられたあとから萩本さんはやるって言ったんだよ。」

「何故？」

「知らねえよ。」

4．ワガママ？（後書き）

暇なので一気に書きました。私が書いているファンタジアっていう作品も更新しました。暇があれば見ていって足跡を残していただけたらうれしいです。

5．やべー楽しい♪

「山口陸！殺してやる！」

高橋がナイフを持って突っ込んでくる。

「待った！待った！」

いろいろと。なんでいきなり・・・。

「黙れぇ！」

一緒に帰ったぐらいで殺されてたまるか！

漫画とかならここでナイフを掴んだり、弾いたりできるけど普通な高校生やってる俺には無理！

「覚悟しろ！萩本さんは渡さん！」

刺さるッ・・・・。

「・・・・。夢オチか・・・・。」

「おはよう陸。」

「母さん。おはよう。珍しいなこんな時間に。」

「まぁね、仕事がひと段落ついたし休み貰っちゃった。」

「へぇ。」

チャイムが鳴った。

「早くないか。まだこんな時間なのに。」

「陸。何言ってんのまだじゃなくてもうでしょ。時計見てみなさいよ。」

「やば。」

そのあとの俺はすごかった。

着替えに一分もかけず、寝癖は水で一気に直し、朝食は胃に流し込んだ。

「じゃ、行ってきます。」

「いってらっしゃい。」

ドアを開けた。

「涼。悪い。遅くなった。」

「ドンマイ。」

鍵はかけずに学校に向かう。

「おばさん休みなのか。」

「ああ、久しぶりにな。」

「おれさぁ彩ちゃんとメアド交換したし、まさに順風満帆だ。」

「へー。」

「へー、じゃないだろ。もっとノッてくれよ。」

「色恋沙汰に興味ないし。」

「お前冷めてんなあ・・・。」

呆れたように涼は言った。

「そういうの面倒くさいし。」

学校についた。

まあ、セーフかな。

「よう、涼。」

「おっす。坂口。」

戸惑っているおれに涼は耳打ちをした。

「・・・同じクラスの坂口健介。」

「えー・・・と、山口・・・だよな。仲良くやろうや。」

「あ、あぁ・・・。」

教室に3人で行くと、もう高橋が来ていた。

「朝から嫌な奴見てしまった。」

「どうした山口。」

「なんでもない。」

萩本のとなりにさりげなく立っている高橋はストーカーのようだった。

おれの席は前と同じで窓側の一番後ろだった。

「おはよう。陸。」

萩本が俺に気づき挨拶をしてくる。

高橋はキョトンとした顔をした。

「おはよう美樹。」

おれは高橋に朝の夢のことですこし腹が立ったので意地悪をした。

「あ・・・・あぁ。」

萩本は何があったのかわからないという顔をした。

名前間違えたかな。やべー。

高橋は予想通りのリアクション。

あ、やべー。これ楽しい。

「陸。おまえ、S入ってるぞ・・・。」

涼は苦笑いしている。

「はいはい席に着けー。」

担任の小林♀（年齢不明）が教室に入ってきた。

「HR始めるぞ。」

ふと隣の萩本を見ると上の空だった。

そんな萩本をうしろの西野が首をかしげていた。

6．思い

高橋の宣戦布告（受けた本人はそのつもりはナシ。）を受けた日から数日後の夜。

「タオルに、しおりと・・・。」

林間学校の前日の夜、陸はいまさら準備をしていた。

「あ、靴下忘れるところだった。」

『ぎゃあぁぁぁぁぁあ！！』

タンスから靴下を取り出そうと立ち上がった時ケータイが悲鳴を上げた。

リアルに悲鳴の着信音だ。

「やっぱり着信変えた方がいいかな・・・。」

といってもおれのデータフォルダには曲などは2，3曲ぐらいしかない。

「・・・はい。もしもし。」

「お、陸。いま何してた？」

「明日の準備。それより何だ。用件を簡単に言え。」

「おれ林間学校の間に彩ちゃんに告る。」

「・・・あ、そ。じゃあな。」

と、電話を切ろうとすると

「待てよ！友達が一世一代の大勝負に出るってのにその態度はないんじゃないの？」

「はぁ・・・。で、何を言ってほしいの？」

「頑張れよ。とか・・・。」

「頑張れよ。」

「いや、だからもっとこう・・・。温かく送り出すみたいな・・・。」

こいつは何を言っているのだ？

「ふーん・・・。まぁ、勝手に告ればいいだろ。」

「大丈夫かね？」

「大丈夫だろ・・・。多分。」

「振られたら慰めてくれ。」

「いやだ。キモい。」

心配性な奴だ。いつもあんなにチャラチャラしているのに。

「鬼。」

「切るぞ・・・。」

「あ、ああ・・・。」

ケータイをパタンと閉じた。と、同時にケータイがまたしても悲鳴を上げた。

そのはずみでケータイを落としそうになった。

「やっぱりかえよう・・・。」

メールは萩本からだった。

『明日は頑張ろう。じゃあね。』

絵文字がウザくない程度に使われたメールだった。

「ああ。」

と、書いて送った。短いが書かないよりマシだろう。

「寝るか・・・。」

おれは布団にもぐりこんだ。

「・・・靴下入れてなかった・・・。」

その夜陸の部屋にもう一度電気がついた。

萩本家では―――――――――――――――――――――――――
――――――――――――

『ラジオネーム恋するウサギちゃんのおたよりです。わたしは――
――』

ラジオを聞き流しながら雑誌を読みふけっていると、電話がかかっ
てきた。

ケータイを制服のポケットからだした。

「もしもし？」

「あ、美樹ちゃん。」

電話は彩からだった。

「何？彩。」

「あああのね私林間学校のときにりょりょりょ涼君に告白しししし
しようとおおおもってて・・・。」

「あ、彩？大丈夫？」

彩の声がふるえている。

きっと顔真っ赤にして電話してるな、これ。

「相田に告るの？がんばりなさい。」

「う、うん。じゃあね。美樹ちゃん。」

告白ねぇ・・・。人の応援ばっかりしている場合じゃないのかも・・・。

ケータイを閉じようとした手を止めまあまあな早さでメールを作り送った。

結構かえってくるのに時間がかかった。

しかし、返ってきたメールは［ああ。］のみ。

あいつ・・・。いつか二行以上のメールを送らせてやる！

さまざまな思いが交錯する林間学校前日だった。

6．思い（後書き）

こんにちは戌です。さて恋するウサギちゃんという言葉に反応したあなた！ずばりポルノグラフティファンか何かでしょう（＾０＾）あとアクセス数がなかなか順調に伸びていっている為削除はなくなりました！！（＾＾）！感想第一号様をお待ちしております。

7．揺れる

林間学校の行われる場所は山に囲まれた田舎だ。

そして今バスに揺られている。

隣には誰もいない。なぜなら本来隣の涼が西野のところに行き、西野の隣の萩本が後ろの女子と話しに行ったから。

だから俺はバスの中で目を閉じている。

なかなか寝付けなかったがバスのテンポよい振動に揺られいつしか眠りについていた。

「・・・みんな寝ちゃった・・・。」

バスの乗客はただ一人を除いて全員眠りについていた。

「あたしも寝ようかな。」

そうは言うものの帰るところがない。彩の隣は相田に取られてしまっている。

話をしていた友達のところは狭いし・・・。

そのとき空いている席を見つけた。

その隣は山口陸。

なかなか起きそうにないしいつまでも立っているのはつらいので、しかたなく陸の隣に座った。

意外にも陸の寝顔は可愛かった。
頬をつつくと、
「んが・・・？」と言うのが楽しかった。
「そうだ、写真とろ。」
スカートのポケットからケータイを取り出し、音の出口を押さえて写真を取った。
うん。よく撮れてる。
取られた本人は可愛い顔で眠っている。
あたしも少し寝ようかな。
その時バスが思いきり揺れた。
揺れた拍子に陸にもたれかかる形になった。
陸にもたれてみるともたれ具合が心地よくてお父さんを思い出した。
生きてるけどね。
あ、離れなきゃ。
・・・陸が起きる前に起きればいいや。
そしてバスの中は全員が眠りについた。

運転手以外は。

・・・・・・・・・・・・・む？

まだついてないっぽいな。

話し声がしないしみんな寝ているらしい。

さて・・・

「萩本。重い。」

・・・ぐっすり寝ている。

可愛い。・・・ん？何考えてんだ？俺。

これじゃ高橋と同じじゃないか。

あいつと一緒か・・・ヤだな。

「起きろ。」

「痛！」

萩本がチョップを下した頭を抱えて睨んできた。

「重い。さっさとどけ。」

萩本がへ？という顔をしている。

聞こえなかったのか？
萩本のくっついていた唇が動いた。
「あんた・・・。それだけの理由で起こしたの？」
「ほかに何かいるか？」
「あんたねぇ・・・、仮にも女の子が寝てるんだからゆっくり寝さしてあげるとかしなさいよ。」
「なら俺にもたれ掛かるな。寝たけりゃ一人で寝ろ。」
「あんた・・・。鬼？」
「かもな。じゃあな俺は寝る。」
窓の方を向いて寝ようとしたら、肩をつかまれた。
「ちょっと。人の睡眠を妨害しておいて寝るなんておかしいでしょ。」
うるせぇ奴だ。
「じゃあ、何すりゃいいんだ。」
「付き合って。」
バスが大きく揺れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2787f/

灰色のセカイ

2010年11月11日19時17分発行